



金の掛からない楽しみ

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝



左：歌川広重「糺町一丁目山王祭ねり込」 右：歌川広重「飛鳥山北の眺望」
いずれも『名所江戸百景』安政3年(1856)改印より。



家康公秀忠公家光公という将軍家の流れが七代の家継公の早世で絶えたあと、家康公の十男・頼宣公を祖とする紀州徳川家の五代藩主・吉宗公が享保元年(一七一六)、将軍職を継ぎました。

三十年に及ぶ吉宗公の治世は「享保の改革」と呼ばれ、過熱した市場経済を引き締め、幕府財政の建て直しと民政に次々と新しい手法を取り入れ、江戸時代のあり方を新しいステージに進めた時代でした。

吉宗公は厳しい「質素儉約」の方針を打ち出す一方、社会全体が暗くなることに対して、色々な手を打ちました。それまで將軍や大名たちの「鷹狩」の場であった品川の御殿山や王子の飛鳥山、中野の桃園に江戸城内の桜や桃の木を移植して日本で初めての「公園」をつくります。

江戸つ子の大好きな、年に一度の無礼講「お花見」の始まりです。

後に「天下祭り」と呼ばれて江戸市民を熱狂させた神田明神や日枝神社(山王権現)の祭礼にも力を入れます。この「天下祭り」の山車行列は江戸城内に入つて將軍の御覧がありました。この時だけは幕府も惜しみなく金をかけて「祭り」を盛り立てています。

さらに小石川の養生所がつくられ、無料の診察が行われるようになり、いろは四十七組の町火消し制度もつくられました。

江戸の市民たちも、いつまでも暗いだけではありません。つぎつぎと「金の掛からない」楽しみが生まれてきました。本の出版も盛んです。菊や朝顔の新種づくりなどがブームになります。川柳や付け句の傑作集が出版されてブームが起こり、夢中になっ

て洒落のめした川柳作りに頭をひねります。

時が流れるにつれて、人々には「質素儉約」の生活があたりまえのこととなり、寄席が立ち並び、蕎麦・天ぷら・寿司などの値段の安い「ファストフード」の屋台が並ぶようになり、縁台将棋に夢中になり、朝は日の出とともに起き、夜は日の入りとともに眠りに入ります。御隠居さんは早朝から菊や朝顔づくりに精を出し、その横を仕事に向かう人たちが急ぎ足で通りすぎ、お店の人は、お店の前を掃き清めることで一日が日の出とともに始まったのです。日本は世界最初の「サマータイム」制を本格的に実行した国でした。

廃品を回収し、再利用するシステムが社会全体に行き渡り、「捨てるものない」社会が生まれてきました。